三日月日記序

此三日月日記といふハ元禄の初つかた
祖翁を武江の深川にいほりして
芦山遺集を撰んとて多くの
詠艸をあつめらる素堂隠士の序詞
ありてそれを三日月の風流なり名月の
句の趣向をまてえらひて三日月日記と

題せりこゝに撰ひ集て東海の行すゑ尽の
名ふりし図司呂丸といふもの年ゆうて みをき
おのこなりしも風雅の誰なるおもひ立く
ゆくこの杖你胡沢より武江の芭蕉庵に
まゐりてやまとひまゆふこつれ昔せいひさまなて
須广あしたとたえてなかさしと都はこそ年も
暑きさりのかるきをうこその懐なりん世々て
ころなくて身過りゆりわするよ
こまおのこ

加の芭蕉庵も今ともひは三日月日記の
草稿をとり師のかたまよもひ侍て今更て
古つてほうりしきれともそれとこそ国の
なふりし作江と云人の我はまへしと
年月さりなて思ひいひ出ゆいて佐川氏香夕
のあるし成む今の一瓢のめしともありきて
作る代こ右沈の人くかくてあり乃えんも存る
おしとて享保庚戌のとし 梅をちりむる

るゝ事ありこれをもて此日記を
いふことは此の草葉なるゝ三日月日記と
侍りけるあるよし祖翁書遺せしを
かゝることゝもこそ清撰も見ゆへかりしくて
言事年月もおくり侍りしかく
かれこれ書きかよはしあつめおきて蓮二代
選情の詞人として百世の記念には
深く人とぞ比類なき三日月の記と

此やさく此の世までも朽ちざり
なんやしとなり

享保庚戌仲秋日

蓮二老人謹序

三日月日記

芭蕉庵三日月日記

序　山素堂

ふる友芭蕉の翁月にゆかりて所を
こゝろね掛りしことし松を待えて
求めなしあら所を敦賀の津にありて
越のあらしにゆきかひまさむの松を
石山のこゝ相にむかし庵をむすひく

琵琶湖の月と詠し二十五絃と
聞えし山郷のわたりあふみなし
文月のころ先設の細し小韓かもさて
むかふ比さこそかはしひたる時の比
下絃の比は雨のさえわたりて初秋の
荒ねね中の絃はありて月のあらう
なれけり西海に名月の思ひとわし
ありとかはる虎とおもふすまれや

ふるさとよりかれなる月を娘かり
清の市と…中に清
こゝろにたわきて入られくして
句ともなるすゑありぬむかしより清の
ありて名の世にあらうる月の
こゝろなるしふ…くれをりけり
御のくりにそて若のこゝろよ
かゝれそ世にかられかしま遍服ん

かくれ家ては人のよふてまの有て信心と
あふら彼まふし松風流の魚しろからや
けふのかられ宗し加茂に講ありなし
まことふてまつりちね侍し

浪うして進むもありけれ三日の月　素堂
三日月や地はおほろなる蕎麦畠　芭蕉
新ちるや葛の裏葉の三日の月　杉風
三日月や京の障子の紋の影　子珊
雨ふくひくきやひくしさう月　依水
三日月やもやもに消る花尾花　桃清
三ヶ月や氣をみなおれ蕨汁　蔦言
島木の月やこそいゆきも三日の月　専吟

ますしや見えとも見えて三日月　宗波

宵月

沈みし七分にあまり宵月　其角

ちりの客と見てゆく宵の月　曾良

豆と柿送りこむ宵出月　子珊

草庵

土釜や指入月にうつる庵　杉風

菜の戸や何さへしよれ松の月　元富

川

月影や鳥のとまれる浪の音　岱水

三つまたや富士ともいひて若月　北鯤

芭蕉を移ス詞

芭蕉

菊は東籬に栄へ竹は北窓の君となる
牡丹は紅白の是非ありて世塵に
けがさる荷葉は平地に立たす水清

うかれむさしのは清純の年にや
栖を此境に移す時芭蕉一もとを植ゆ
風土芭蕉の心にやかなひけん数株の
茎を備へ其葉茂り重なりて庭を
狭め萱か軒端もかくるはかり
人呼て草庵の名とす旧友門人ともに
愛して芽をかき根をわかちて
処々に送る事年々になんなりぬ

一とせみちのく行脚思ひ立て芭蕉庵
すてに破れんとすれはかれは籬の隣に
地を替てあたり近き人々に霜の
覆ひ風のかこひなとかへすかへす
頼み置てはかなき筆のすさひにもかきをく
頼し松はひとりになりぬへきにやと
遠き旅寝の胸にたゝまりて人々の別れ
かの芭蕉の名残ひとかたならぬ侘し

さし給ふおとゝし又旅をうつして
ふたゝび芭蕉になみだをそゝく今年
五月の半ば花たちばなの匂ひも
さすがにとほからざれば人々の契りも
昔にかはらず猶このあたりえ立さらで
旧き庵もやゝちかう三間の茅屋つき
づきしう杉の柱いと清げに削りなし
竹の枝折戸安らかに葦垣厚くしわたして

南にむかひ池にのぞみて水楼となす
地は富士に対して柴門景を追て
ななめなり浙江の潮三ツまたの淀にたゝへて
月を見る便りよろしければ初月の夕より
雲をいとひ雨をくるしむ名月のよそほひ
によしとて先ッ芭蕉を移して庵の軒に
其葉七尺あまり或は半吹折れて
鳳鳥の尾をいためしめ青扇破て風を

ぬしむ過てもはしるにやうれうし次
堂をえわれ斧にかうりてかの山中不材の
類木にまかせて其性をうらし僧懐素は
これは筆をもてうらし張横渠は新筆を
みて修学の力をもしる黎亭ここに可を
とりて唯此嬉しあらひて風ゐよ
終れやうしれとあるらるゝ

名月

17 名月や池をめぐりて夜もすがら　芭蕉

川ばたの家居に山は川ゑの月　其角

川むかひの畠をあるく月見かな　杉風

20 青鷺の立すくみけり今宵月　子珊

名月に萩ある庭はかりの家　初志

春や月つまはせて唐ひの中　宗波

名月や菊畑にたちはなさぬ　百里

名月や元気とてるきて水の盃　小覲

開戸やまてあけたきまゝの月　紫舟

ふなしも月にて清川宿り　而已

なつひなく頼て月にて汲男　芳言

名月や獨あゆみの手引向　兼山

名月の水にうきり声の懐　影堂

名月のありしにいか栗湯かい　象彦

此月よ声はかりて谷の峯　松風

鶏かこゝに濡れきたら月ならぬ　千川

名月や草の関ゐも白露む　石柳

松の露やちる家待れまつの月　洪菊

旅店

長途と猿によ夜のまゝの月　曲水

いて折こ月ゆのたなしありけり　許六

ねたりせぬあられぬ江の月見哉　　里東

名月や隣とりおいて栗のかり　　去来

山路に道迷して

宿もなしや宿かりも月の窓ひとり　　仝

終に家によりける分月見かな　　史邦

旅立する人にあひて

名月や行きても引かる柄袋　　珍碩

名月やすゝ喰負れ晴とつかん　　濁子

名月や大盞とりて蔦まきを観　　嵐雪

楠の香や家書ふ角寺の月　　桃隣

名月やのられぬ小舟の行手棹　　杏雨

秋風をきゝて来て見月見かな　　梅雀

隠れ住て宵からいで夜ふかし此月　　雨洞

名月の影れきしこそや笹の影形　　嵐蘭

名月や川音寄間や家ゆかし　　善扶

名月やかんかりける酔造　　仙化

山も川も素人となりしけふの月　渓石

松嶋にて

雲嶋や抱そのかしまふの月　呂丸

名月やゆりもとさるとあみ海やま　重行

此句を呂丸旅宿にて書て
残りし言葉に記て

納涼のあくや竹捨ける和漢
月のおもしてうらしむ

破風口に日影やよはる夕涼　芭蕉

煮レ茶ヲ蝿避クレ烟ヲ　素堂

合一歓醒ム二馬上一　仝

かきなれ小田の糸蔵七　蕉

月一代シロ見ル二金一氣ヲ　堂

露一盤ケサ添フ二玉一涎ヲ　仝

張旭か物かける酔の中　蕉
幢とたてまつれ村竹　仝
挈帚驅偸鼠　堂
ぬのきぬは頭ふおほふ　蕉
くれうぬ首かざる松の襟　仝
これとのむ孫よ依と着する　仝
舟ハ鞫風早ノ浦　堂
鐘ハ絶日高川　仝

顔ふり早苗の頃よまさそ　蕉
今ちもとけぬ故き火のうけ　仝
詑ハ徽三社本ナラ　堂
韻ハ使五車填　仝
花月丈山閑　仝
篠と杦く春の宮　蕉
剪銀點一寸　堂
箕面の滝やむと鮎らん　蕉
ありぬれ頭の祉とかくやうし　仝

風猨唳早乾　　蕉

よされたる霧のふきあけ行くれて　　堂

門を火とほて庵の夕月　　蕉

霧籬顔飄舞　　堂

霰浦月潜浮　　蕉

ぬどん見てこそねよ似たる色の夕　　堂

ころも秋ね露の玉珠と眼指　　蕉

山伏山平地　　堂

竹畫竹小天　　仝

鶺鴒窺水鉢　　蕉

雲ねよくりてかれまうやけ　　堂

鳳ゆくき御風の辞題よもとえて　　蕉

臨谷伴蛙仙　　堂

元禄八月八日終

三日月塚誌

こゝに享保庚戌の夏出羽の露圓なる
人〻のおもひ立給ふ事ありて芭蕉翁の
塚を造立せんとて此国に行脚の昔
涼しさやほの三日月の羽黒山といへる
遺詠ありしと今の碑面に録して
永くこゝに残れとおもひけんとなりさはかし

風雅の親切なりける人の報恩
なれかしそも〳〵翁の墓は湖南の
木曽寺を初として武江の深川に
残る塚あり伊賀の上野に枯尾塚
あり洛の雙林寺に七字の謎文に
石碑ときこゆく近江の雪田に笠塚も
越中に井波の翁塚も加賀の金沢に
無縫塔あれは越前の府中に色紙塚

ありて難波をまして経平の比なれは
花の課とうたひつゝおりし所を
綴中のもの世継のも脈好の続なるも
ありと中由治や英流尾張ハ殖田の
地なれハ大将よ尾ぞ塚あり笠ちるよ
よ鳥塚ありておうそ日おひ六十余卅よ
ミうよ尋ねれハミうよいまひさこくく
三十二應の尊とうちて祈すけり

としてハ儀なきらんやえなり奥羽の
承ふハ生前の孫霖よおりしとまひてあるハ
松島のむかしうれあるハ象潟の為よ
僕てなくくこを聴も此境をつくなし
猿りしまりてハ此所の冥加と称んとも
また様の寺むけより松橋の高縁
まうれて松ハ所楽のかさしよ称楽
葉の花ゑへも海わやりなきんまして

此句月の廿二日ハこゝろ縁となる日なれ
一句一章にむかふしるしやにれは
ことしの法ハちんたらぬ人あつまれり
翁のひかりを仰れてむかしく偲ぶなり
三日月塚の一碑ハ月くは花
あるまじきへし

東鶴之人
獅元坊里紅拝誌

石塔供養　長歌行

三日月の哀もゆふなり夜あれ　星紅

行けし山の風薫る時　素夕

唐韻もいろはの智恵にかへて　風草

菊見の菜類の露降り　郭　嵐七

お姿をとられ相識もし代金　芦錐

りよ歌のわすかりく筆　白之

来地さえまさ町の名も定まりき　野秋

嘯行くはな書所音葉　千知

舞子はなてふると渉くも武田流　兆而

杖の徳本を　釋教のみ　一飛

来より雨　石塔の暮やうく　寄子

もてあそふもゆくの夕宮　里柳

小袖をぬらりに猫の音もき　宇兆

かくとまかりて住む庵松青　支松

30

短冊もむの楮に喰まして　知
池ほと賞の葉に詠み子　子
膝も角おもして春は倦み魚　飛
契りに御花寺の者と　兆
二つ地とう人つへ人知照あり　柳
花に涼しき浮しも手物ある額時　了
むかふ竟見まる鳥を除りゆら　素
園三郎いわ茶桜して居る　夕

20

月の名をなかれとはのなかめ日　呉天
舟の跡まてにこまれ下冷　京
夢醉にこそ身しる露の濡　夕
殿は佛像は皆十八九　錐
鳥起と火と時計の四つ下り　七
佛の前ましる積を日　秋
縫針まで作り来て寄と思し　之
畳と川流て庭に雪し　而

よい風かくせの燭さしり　菜
主の留守にかくる　七
枕元を狭くてありさし道　雅
鶯薫によくれる信の萩行　之
杜宮の葺もしさすね日備え　杜
頭の白髪の取るに拭　知
目うけてもる谷辰の夕菜所　而
草を羞れる菜根も不　菴
法は世を払き他の寺蔵く　子

川へ落るゝ情に清しや　柳
山公も内説出に宮ね宗　兆
座は病めも咽掬り出し　去
肩衣をまくして走る劉　天
みなもぬく人盆のちりょ家　菜
いかり樽ぬきうけて女新　夕
抱きわのくし咽白猿　雅
またしも縄かくも入のさ空　七
雲の不易に振りの藤　桃

羽黒山十詠

羽黒ノ晩鐘

三日月のかけて飛日や晩の鐘　蓮二房

南谷ノ山ノ桜

南谷けの山よりハ桜やむの雲　佐蘭

荒沢ノ春雨

荒澤の名や浮流く春の雨　蘇守

吹越ノ青嵐

早ひろ河ゆるゝ吹越の青あらし　山濤

袖浦ノ漁火

いさり火の麻てまて涼し袖の浦　童雲

鶴カ岡ノ夕霞

蓮葉の露やふ竹の露哉　吟囊

月山ノ有明

有明のあく南ぞ月の山　倚彦

寂上川鳫

稲舟や鳫も世をさる〳〵上川　　鷺洲

鳥海暮雪

飛鳥の声よあかしな岸の雪　　巴静

蘭若紅葉

苔の戸もれ初紅葉や原よかへやくあらし　　百阿佛

追加

題東博浮

糸瀬やとこ人間怯の了者多　　伊勢　乙由

野子味の竹や花葉のこゝろより　　桃如

篤子もむさく橋松の住居れ　　素堂

秋故人の詩よよ岸の柳糸　　午潮

雷のあと鞍しき月おゝ雨　　仙行

南浮を茶子の浮世や笹粽　　玉之

唐細のちまき結ぶや雪の竹　夜白

春もやおもりのかぜに柳哉　松夫

色よける衣をかしこく柳かな　朝君

名月は浮世の銭屋や宿かな　京 吾仲

此ころも背戸うちあかし小夜あらし　芝字

精をれ生海鼠と料る胡瓜かな　山只

名月やひえくもる山おろし　杜吾

俤ふと思ひ出す星あり衣簾　近江 佐角

木の葉より先へ立つる時雨哉　羽岳

物思ひをさとらしと旅立つ行燈　宰陀

明日きてね額の堂や紅葉の枕　美濃 白狂

桐の葉に捨ててあるゝ団扇かな　祀丈坊

淀伸の粧もちらし更衣　童平

行ふさましちし終を穗の月　水胡

蓮をまき鉛盆は仏を合　吏荊

深団扇祖父の翁工のあかさ　綿太

咲く春のまつまのむし火や　有琴
みち通り梅に嵐そ立れ雪　洞楓
叢園の水ちくさんに氷室ふ　鯉哉
名月や垣の雛も色の紅　栗几
老柳や縁に息のかゝる雪　六芝
色々や夕紅さしめ息見さ　東羽
夕立のもとる揺ありすゝの字　与象
藻の花の露紅つんてに川営　作　侃如

湛仙に餅をはくれて牡丹哉　達支
刈田見て牛にやるゝそれおはな　摩山
まかくれね柳にそうしねの月　杏琚
梅はなきり葛を無に垂れにう　三也
ひとつのひ咲や錦るの雨　隆五
峰しくてもとれ白苑やまをの山　东李
雛るまの霞や垣根にきられ秋　半茲
瓜の音や何もて西所に枯の照　楊波

神垣の代神楽に極りけり　呂杉

松の名の高きもよき小袖かな　鷺仙

海山の錦や照に傾く鯛　杉路

うら枯てなや月夜の蛩　東巴

山吹の流よう泛てや鯉の鰭　蒼鳴

松縄も庭に積ぬ落葉かな　琴夜

名月や行く向ふる雲月清　藤先

こぼれふりきぬも寒て初桜　稚巴

あかそよ枯もゆかしく更科に　尾張 巴雀

鶯の聲きても霜へ余所なれ　之径

降しう夜ふけれは月夜や皐禾槿　孝士

重顔や凧に睡つ欹まれ　馬六

石葉の紅葉盛にかやとう初雪　江之

行脚も朝の尾と帰り柳かな　越前 東恕

天さうしてさくら咲る　砂風振作　紀白

沈み際の天まで暑す影の星　四風持

春は白に月なや菜も咲にけり　帰的
麻の芽も出るにたかし鶯の声　柳皷
此翁ちゃ吉里ゆかしさゝれかな　六枳
さびしさの浄瑠璃聞て柳陰也　云跂
蝋の里に中休して一夜かな　擬遠
引うけて菜园に赤川も暑かれ　葦吹
武士の折目高さや文衣　山涼
大名の旅行にまかりし　杜舟　竹嚢
咲に時の暑さいとゞ枇杷の花　飛嵐
天人の脈つゞくや雲の峯　情也
雲月に山でおりゝる鳥かな　加賀亡人　馬泉
手折とむの傷く八十かな　梅石
神島やこゝろも染ぬ鳥かな　開芝
雪のあれ柏に出る風の音　千代
卯のむや精ことにかゞ詮議あり　半睡
風蘭や山のたゝと中につなれ　若推

行地や柳のうけの定てさ　蘇守
雲間も晴て哀や吹子川　山隣
白鷺の蓑笠埋む青田かな　風曲
鶯や青柳も葉の下にこそ　帝周
蜘の囲に放家絡背のエまで　能登 司鄭
雪掃てひとり明り行戸　寡味
七種の雪に紛れし蕗の薹　越中 方堅
七種のあまりを祝ふ八百屋かな　兼従

祐々降さし白いやむ萩　鳳吹
冬枯の沖にちりてや帆かけ船　眉泉
味噌橋の網に張て行かたに　杜亮
涼風といのりてあさまかな　友言
一雨降て朝皃かれて葉の末　巴龍
橋に添ふ垂るや茶の雪　林和
分け入りて清水と湯川や夜寒哉　立趙
風の中に吹るれむしのあり　二川

竹の子も生る時代や冬牡丹　一庸
山吹や或日の顔にものを語　倚彦
鶯過の行手をまはるいらこに　枝中
主守の顔なからめり柳かれ　越後 丸蛘
江戸にも總持の名あり松の暑　貞虎
京濱よあさ日のさよう蓮のむ　如氷
ひ喧や曇い年の出来不出来　巻耳
橋人の息の寒さや流し網　杜由

雲行く秋来通る月ある夜　鷺洲
障子まで詠く竹風のあさかな　此柱
行くのむれ浦まで行く霧かな　葉園
白鷺を波の花とて思はれ　北須
横雲の一刷毛涼し屏風谷　梓仙
山端に溜りも去る須磨の秋　江戸 水翁
万歳の日和うらゝか鼓かな　長水
古一つ雪吹かれ流れ行く哉　飛弾 午有

110

むよ伐人茶の名あるを二ツ星　遊実

こゝちよく秋しむのふけさに　備中　簑里

沈雁よ行のあはれの柳かな　讃岐　筆蒼

名月や明る影を青野川　筑前　杏雨

酒売の足よりかゝる霧のむ　杏雨妻　市女

百味ても秋き雪をこらて高き月　肥後　乙語

名月や明も暮るゝ御代となり　長門　危朝

酒はむと茶ともきつて三夜をはね　枕酔

秋秋もまさるもし三日の月　長崎　加十

酒くさき人と過ぎるかはれは　其帛

扇屋の行もまれさね男の舟　佐渡　挹樸

雨むしや松のうへ行帆の行衛　素雪

かつ鶴よ松もまつは放生会　翁　世柳

海さや風の音あるみ稲乱　本庄　英義

夕月のうし沼や一方の峯　知仰

あれのうくま宿とる庵の菊　英良

名月や稲の穂並のよき夜　淳節

夕立に下帯流すや蝸牛　延頼

菅笠の姿見えして田植哉　常体

月影と浮に流るや藻刈舟　丈我

刈もてゆくも知らでまねく尾花哉　捨丸

襟もとへちよと飛し霜の朝　自習

竹川の竿に蓑着る路不　松翠

かゝらぬに蔦の繁りや釜　箋風

隠ろさぬ出羽の野山と杉の雨　可及

七曲八坂登りし雲の峯　羽黒 東暁

春れのくらに消ぬ地あり仏も　百渓

あかり雨やおくつてる山の色　倶示

梅神を拝つくこゝろの蕊ぞ哉　梅笑

簾の音や障子一重も山の奥　草風

若梅や桑の若葉の青がし　素石

涼しさの声もしに浮や夏の雨　永林

神のるすと蓋する池の落葉かな　方上

うくひすや別深きれ隠れかな　久武

あさかほや　閨の廊下の探り足　雲中

鳥魚をとりのこして詣や薬そり　呂笳

立春の雨ま公事ある露のかげ　藤嶋 竹童

山ゆきや化粧の顔も鏡　将川 萄雨

名月や襟もれの根へ白く　鶴岡亡人 竹郷

卯の花も母元来良やる楓　尚七

神楽や陰撰く川山の形　呉天

啼きしね前の年やち撃の地　胡々

色白に賀ちてつれつれ紅ゐなる　舟英

山里や三葉錦手よ雨りに　松亭

秋のうつろふ菊の香や雨の月　洵水

雨の日や赤りてつれつれ鶏頭　五菊

うく花すや鳥日に行捨のなかく　百乃

涼まくらまる秋やるゝ袖て涼し　弁行

姑の談義をききぬ彼岸かな　三郷音
はつ咲にかりかゝるや三日の月　一穂
草のもと拾ひ梅ちる下駄かな　山風
吸筒も底をたゝくや山さくら　千峯
住吉の橋もとまれぬ霞かな　東明
うすき小袖し若木模様哉　里柳
竹藪の鶯静なりまつの前　鳴鶴
行春に氣ぬけの声のあはれかな　巴丸

一文は遠くふきれ唐からし　蔓夕
衰しの暮の風に一筋簾の夕　羽考
涸よ日の落て無木末かな　芳仙
添ふて二日和もちりや冬の様　里飛
まだうへし紅葉に昭さうもみぢかな　永甫
虹の尾によりて山の時雨哉　一雲
麦芽や東山子の扉に起きなり　指之
こゝろよりも亡き人のあれ氷柱かな　鶯遊

積る氣にならぬくされ粟に　不止
志ぐれけりそれも佛兄の行住　紅嶺
うぐひすや夕日の残る藪の中　市閑
春風にまかせてまことの浦島に　梅吟
風の音を振こぼしたる鳴子かな　可怨
名月や富士も日なかの男ぶり　僧和薫
詠ゐの手に行きぬる火燵かな　壺英
網に浪にかゝるよし鳰雀に　杜由

涼風の浪をあるくや寺の客　宇北
入舟にさゝ浪わたし雹の角　枝睡
月にさまと寄るやうき村時雨　南江
通り矢の数にあつまれ燕かな　一飛
引汐の岸まで澄むや杜若　嵐七妻之
樫や夢みて藪をとふるし　只白
鳥のこらは日あしにまよふ氷かな　白之
立川に辰川あれ世も冬し蜆汁　素舟

190

青子原の袂にはくや花の蔭　野秋

夏の日や瀬にれも雛子比夕　十和

身は色の行にも香やきしのむ　兆而

大根を隣にもちし蕎麦哉　芦雉

稲妻の写るさる花や三日の影　魯子

川岸のあともん濁さぬ日和哉　友松

蛉の巣小ちい行にかりて枯尾花　李夕

最りなかん前も讀ると御世事哉　風草

三日月塚懐旧

埋名を三日月塚と、一と音祖翁の川柳の江は山は松をそえ見をうつして深しさやかの三日月の影すゝとふれ初深の唱よかく讃ひてちかふりしぎあまりのまてそや残て萬よおりく龍のこゝろをなくさむまことや玉魂の

いかばかりこゝろ杉の木末もきえかゝるよ
三日月の影ぞ月くまでなれ

蓮二老人

齢も出羽の国なればこそ
おくれて三日月の名も見めしと
五十年の養れ笑ひよりもなし
秋の川衆の秋も白雲

懐未曾寺名月

李夕

月みれんひとしからされ
野ゝ宿門山とうかれ影行つ
ふるさそ行ゝ物うかりしくも
殿津よあかねへをめさ思ふ

懐発句塚時雨

風草

きさむりしも塚をえらしは
住かける世の人のなつかし
そうに見るなをえるかうう
時雨よからて武蔵野の月

懐雙林寺墨直

嵐七

こと和月と読しあれしへ
いまん偉の墓をなうひて
時も移生の中の二日には
ものうけりて墨あらため兒

京寺町二条下ル町
橘屋治兵衛板